

Title	シラーにおけるヴァレンシュタイン像の文学化： 歴史哲学の破綻と「詩的眞実」による人間形成構想
Sub Title	Schiller's concept of literary fictionalization regarding Wallenstein's figure : from philosophy of history to pursuit of Bildung through "poetic truth"
Author	鈴木, 優(Suzuki, Yu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.96 (2023.) ,p.[17]- 33
JaLC DOI	
Abstract	<p>In den 1790er Jahren beschäftigte sich Schiller intensiv mit der Kantischen Ästhetik. Bis er wieder zur Literaturpraxis zurückkehrte, ließ er in dieser Zeit alle historischen und literarischen Projekte beiseite. Schiller nannte die Grundlage der ästhetischen Wirkung „poetische Wahrheit“. Anders als die „historische Wahrheit“, welche die Geschichtsschreibung anstrebt, scheint sich dieser Begriff auf die Vorstellung der Welt oder die Beschreibung eines Gegenstandes zu beziehen, die in einem Kunstwerk zum Ausdruck gebracht werden müssen. Aber welches Weltbild sollte im Kunstwerk nach Schillers Auffassung behandelt werden und wie sollte es im Kunstwerk repräsentiert werden? Es stellt sich also die Frage: Was ist der funktionale Unterschied zwischen Geschichte und Literatur in Bezug auf Schillers Bildungskonzept?</p> <p>In der vorliegenden Arbeit wird versucht, anhand einer Interpretation des Wandels der historischen Figur Wallenstein in der Geschichte des Dreißigjährigen Kriegs (1791–1793) zur poetischen Figur im Drama Wallenstein (1800) diese Fragen zu beantworten. Hatte Schiller in der Geschichtsschreibung Wallensteins Handeln als „Verrätherey“ beschrieben und damit seiner historischen Tat einen Sinn gegeben, so zeichnete er im Wallenstein-Drama ein passives Heldenbild. Dieses ist nicht selbstbestimmt, sondern eher anthropologisch von inneren und äußeren Faktoren bestimmt. Wallenstein wird in eine Situation versetzt, in der er so entscheiden und so handeln muss. Dieses Heldenbild zeigt uns nicht den Sinn seiner Taten, sondern vielmehr den Konflikt zwischen „Naturkräften“ und der „Freiheit des Menschen“. Diese Veränderung im Drama und deren Grund werden hier anhand der Kritik Schillers am modernen Subjekt interpretiert, die er in seinen ästhetischen Schriften der 1790er Jahre entwickelte. Schiller kritisiert das Verhältnis des modernen Menschen zur Welt und reflektiert gleichzeitig über das (Kantische) teleologische Urteil, das auch Schillers aufgeklärte Geschichtsphilosophie charakterisierte. Am Ende der vorliegenden Arbeit wird die Poetisierung Wallensteins als Schillers Versuch der Darstellung der „poetischen Wahrheit“ erörtert, mit der Schiller Lesern und Zuschauern eine Erfahrung des Erhabenen zu bieten suchte und so einen Bildungsraum vorbereiten wollte, in dem sie ihre Seelenkräfte ausbilden können.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000096-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈論文〉

シラーにおけるヴァレンシュタイン像の文学化

——歴史哲学の破綻と「詩的眞実」による人間形成構想——

Schiller's Concept of Literary Fictionalization regarding Wallenstein's Figure

From Philosophy of History to Pursuit of *Bildung* through "Poetic Truth"

鈴木 優*

Yu Suzuki

In den 1790er Jahren beschäftigte sich Schiller intensiv mit der Kantischen Ästhetik. Bis er wieder zur Literaturpraxis zurückkehrte, ließ er in dieser Zeit alle historischen und literarischen Projekte beiseite. Schiller nannte die Grundlage der ästhetischen Wirkung „poetische Wahrheit“. Anders als die „historische Wahrheit“, welche die Geschichtsschreibung anstrebt, scheint sich dieser Begriff auf die Vorstellung der Welt oder die Beschreibung eines Gegenstandes zu beziehen, die in einem Kunstwerk zum Ausdruck gebracht werden müssen. Aber welches Weltbild sollte im Kunstwerk nach Schillers Auffassung behandelt werden und wie sollte es im Kunstwerk repräsentiert werden? Es stellt sich also die Frage: Was ist der funktionale Unterschied zwischen Geschichte und Literatur in Bezug auf Schillers Bildungskonzept?

In der vorliegenden Arbeit wird versucht, anhand einer Interpretation des Wandels der historischen Figur Wallenstein in der *Geschichte des Dreißigjährigen Kriegs* (1791–1793) zur poetischen Figur im Drama *Wallenstein* (1800) diese Fragen zu beantworten. Hatte Schiller in der Geschichtsschreibung Wallensteins Handeln als „Verrätherey“ beschrieben und damit seiner historischen Tat einen Sinn gegeben, so zeichnete er im Wallenstein-Drama ein passives Heldenbild. Dieses ist nicht selbstbestimmt, sondern eher anthropologisch von inneren und äußeren Faktoren bestimmt. Wallenstein wird in eine Situation versetzt, in der er so entscheiden und so handeln *muss*. Dieses Heldenbild zeigt uns nicht den Sinn seiner Taten, sondern vielmehr den Konflikt zwischen „Naturkräften“ und der „Freiheit des Menschen“. Diese Veränderung im Drama und deren Grund werden hier anhand der Kritik Schillers am modernen Subjekt interpretiert, die er in seinen ästhetischen Schriften der 1790er Jahre entwickelte. Schiller kritisiert das Verhältnis des modernen Menschen zur Welt und reflektiert gleichzeitig über das (Kantische) teleologische Urteil, das auch Schillers aufgeklärte Geschichtsphilosophie charakterisierte. Am Ende der vorliegenden Arbeit wird die Poetisierung Wallensteins als Schillers Versuch der Darstellung der „poetischen Wahrheit“ erörtert, mit der Schiller Lesern und Zuschauern eine Erfahrung des Erhabenen zu bieten suchte und so einen Bildungsraum vorbereiten wollte, in dem sie ihre Seelenkräfte ausbilden können.

* 日本大学芸術学部助教 慶應義塾大学文学部非常勤講師

Key words : Friedrich Schiller, Poetische Wahrheit, Wallenstein, Geschichtsschreibung, das Erhabene

キーワード：フリードリヒ・シラー、詩的眞実、ヴァレンシュタイン、歴史叙述、崇高

はじめに

1790年代、歴史研究から美学研究に向かったフリードリヒ・シラー (Friedrich Schiller, 1759-1805) は、芸術の美的効果の基礎にあるものを「詩的眞実 (poetische Wahrheit)」と表現した。この概念は、歴史や現実の記述を超えて、芸術作品において表現されなければならない世界像や対象、あるいは模倣の際の法則を意味する。では、シラーは芸術作品にいかなる世界や対象が、どのように写し取られるべきであると考えていたのだろうか。そしてこの「詩的眞実」は、芸術の受容者にとってどのような人間形成的意義を持ちうるのだろうか。この主題を追求していく第一歩として、本研究ではシラーの歴史叙述『三十年戦争史』 (*Geschichte des Dreißigjährigen Kriegs*, 1791-1793) に登場する歴史的人物ヴァレンシュタイン像と、それをもとに創られた戯曲『ヴァレンシュタイン』 (*Wallenstein*, 1800) の主人公像の差異に着目したい。

1786年頃から1791年頃にかけてシラーは本格的な歴史叙述に励んだ。『三十年戦争史』は、シラーがイェナ大学で歴史の講義や研究を行っていた時期に執筆された三十年戦争をテーマとした歴史叙述であり、1790年に第一部が、91年から93年にかけて第二部が、『婦人のための歴史カレンダー』 (*Historischer Calender für Damen*) に掲載された。三十年戦争について歴史研究をするなかでシラーは歴史上の人物ヴァレンシュタインを発見し、その運命を悲劇の題材として戯曲化することを思いつく。こうして創作されたのが、ヴァレンシュタインを主人公とした戯曲『ヴァレンシュタイン』である。しかし、歴史叙述『三十年戦争史』の執筆から戯曲『ヴァレンシュタイン』の完成までには約十年の時間が経っており、その間にシラーの著述家としての活動は大きく変化した。『三十年戦争史』の発表後、歴史叙述から距離をとるようになったシラーは、1790年代、美学やカント研究に励み、一連の美学的・哲学的著作を残している。教育学研究で「美と教育」について論じる際に古典として参照されてきた『人間の美的教育について (以下、『美的教育書簡』と略す)] (*Über die ästhetische Erziehung des Menschen*, 1795) や崇高論もまたこの間に執筆された。つまり、戯曲『ヴァレンシュタイン』はこうした美学理論や美的人間形成構想を理論的基盤として——文学作品の中にその理論が直接適用されているわけではないにしても (vgl. Godel 1999, 148) ——成立したとすることができるのだ (vgl. Oellers 2011, 114)。そこで本研究では、歴史叙述の中のヴァレンシュタイン像と戯曲のヴァレンシュタイン像の描かれ方の差異に、シラーの歴史哲学構想から美的人間形成構想への移行を関連づけ、その変遷の背後に、シラーによる歴史哲学批判や近代批判を読み取ることを試みる。シラーはなぜ歴史を戯曲化したのか。ヴァレンシュタインの文学化の背景には、芸術作品という陶冶空間の持つ人間形成的作用への期待があったと考えられる。このヴァレンシュタイン像の変化の内在的理由を明らかにすることは、シラーの美的人間形成構想を理解するためにも必須の作業となるはずである。

以下では、まず歴史叙述『三十年戦争史』と戯曲『ヴァレンシュタイン』に関する先行研究の動向を整理した上で、両作品におけるヴァレンシュタイン像の特徴を明らかにする。そして美学的著作で展開される近代人批判と関連づけることで、ヴァレンシュタイン文学化の理由を検討する。こうして戯曲

『ヴァレンシュタイン』の創作を「詩的真実」を通じた美的人間形成の試みであったと仮定し、シラーにとって「歴史的真実 (historische Wahrheit)」とは異なる「詩的真実」の法則が何を意味するものであったのか、またそれがなぜ必要とされたのかを探っていく。

1. 「歴史的真実」と「詩的真実」

シラーの歴史叙述『三十年戦争史』におけるヴァレンシュタインの描写と、その後の美学との取り組みを経て創作された戯曲『ヴァレンシュタイン』の主人公像は、これまでのシラー研究においてもしばしば比較されてきた。とりわけ両者の差異を「歴史的真実」と「詩的真実」の区別をもとに論じ、「歴史的真実」から「詩的真実」への移行、すなわちヴァレンシュタインの文学化により、逆にシラーが「真実」に一層接近することに成功したとする解釈が多く出されている。まず、ヴァレンシュタインの文学化によりシラーが「歴史的な世界」に一層近づいたことを評価したのはディルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833-1911) であった。歴史家ランケ (Leopold von Ranke, 1795-1886) に代表される、厳密な史料批判を通じた、より科学的で客観的な実証主義的立場が19世紀の歴史記述の主流となっていくなかで、特殊なものを普遍的なものへ還元しようとするシラーの歴史叙述 (歴史哲学的な立場) は批判されてきた。ところがディルタイは、戯曲『ヴァレンシュタイン』を「哲学よりも哲学的であるのみならず、史実をめぐる歴史記述よりも歴史的である (historischer als die Geschichte)」という表現で評価した (Dilthey 1957, 411)。ディルタイはシラーの超越論哲学の本質を「より高次の段階において、ソクラテス的な最上の思慮深さから自己と生を (...) 意識すること」と表現し、シラーの戯曲においてはこの普遍的な生の捉え方と歴史的な生の捉え方が結びついている点に着目した (ibd.)。つまり、シラーがヴァレンシュタインとその運命を歴史的諸条件から導き出し、因果的關係にしたがった「一つの歴史的な世界全体」を表現したことで、われわれに「歴史的世界」を教えてくれる戯曲の創作に成功したというのである。それが可能となったのは、シラーが〈本当に起こったこと〉としての「歴史的真実」ではなく、〈起こりうること〉という「事象の内的可能性」である「詩的真実」に従ったからということになる。シラーが歴史的な事象の超越論的根拠に迫ることに成功したとみなすディルタイの見解は、現代のシラー研究でも引き合いに出されている。青木はディルタイの論を援用しながら、シラーをヴァレンシュタインの文学化へと向かわせたものは、啓蒙主義的歴史研究において信じられてきた歴史の客観性への不信感、一つの立場から捉えられた記述としての歴史に対する痛烈な批判にほかならなかったと述べる (青木 2014, 180)。さらに青木は、シラーがカントの自律の原理をあらゆる存在物へと徹底させた結果 (一犠牲の論理)、それまで主観的な表象に抑圧されていたがゆえに押さえつけられていた「影」(主体の力ではどうすることもできないもの、「生じてしまったかもしれない」という潜在的な運命への不安や恐怖) が解放され、カント的な自律的主体が自ら背負うことになった悲劇的な「宿命」を提示することとなったのが悲劇『ヴァレンシュタイン』であったと論じる (同上, 208f.)。一方、ゴードルは、史料の信憑性という『三十年戦争史』で出てきたヴァレンシュタイン像の問題をシラーの人間学と関連づけ、これを内的・外的自然に規定された人間が歴史的事実の真の認識に到達することの困難さをシラーが悟っていた証拠とみなす (Godel 2009, 108f.)。そしてシラーが「歴史的真実」に対し「詩的真実」を選択したことで、人間にとって普遍的な情緒的・認識的な法則にしたがって、歴史的な事象を受容者に共感可能なものへと作り変える方向へ向かった点を強調した。結果として戯曲『ヴァレンシュタイン』は、人間がいかなる状況で、なぜ、またどのように行為するものであるのかを提示することに成功し、受容者との

関係において価値を持つようになったという(同上, 114)。またホーフマンは、「歴史的眞実」に目を向けようとするときに出てくる生の多義性、行為の矛盾、そして出来事の背後にある個人の意図を判断することの難しさといった問題が、シラーにヴァレンシュタインを文学化するきっかけを与えたと論じる(vgl. Hofmann 1999, 252f.)。歴史上のヴァレンシュタインが示す矛盾した行為は、彼を単なる悪人、王位の篡奪者として一義的に描き出すことを許さない。ヴァレンシュタインがボヘミアの王冠を得ようとしたのは野心からであったのか、平和や信仰の自由を望むという動機からであったのか、これはある種の価値観を考慮せずには判断し得ない。ホーフマンによれば、このような歴史的行為の多義性が明確に現れる人物としてヴァレンシュタインは戯曲の題材に選ばれた。このように、歴史を一義的に説明するのではなく、歴史における意味づけを開かれたままに保とうと試みたシラーの歴史的フィクションは、歴史的テキストの物語性を主張するヘイドン・ホワイト(Hayden White, 1928-2018)らの現代アメリカの新歴史主義においても評価されている(vgl. Elm 1996, 96f.)。ホワイトは、歴史的事実や客観的実在とされるものも、人間の言語により媒介された構築物にすぎないことを主張した。過去の行為主体の意図や動機をその時代の社会的文化的慣行に照らし合わせ理解しようとする努力が歴史家によりおこなわれるとしても、そこには書き手や読み手の想像力や解釈が入り込む余地があり、歴史は自然科学のような「客観性」を持ち得ない(ホワイト 2017, 159-195 参照)。要するに、シラーがヴァレンシュタインに関する「歴史的眞実」を断念し、それを「詩的眞実」へと高め物語化したことは、過去の限定された領域の「事実」を「ありのままの歴史」として発掘できると信じる者たちに反省を促し、壮大な「メタヒストリー」理論を構築する歴史哲学的な立場を改めて主張するホワイトの立場に通底するのである(同上, 165)。

上記の一連の研究が論じているのは、客観的な「歴史的眞実」に辿り着くことの不可能性に気づいた結果、シラーが「詩的眞実」という事象の中に現実化可能なものとして存在している力としての「内的可能性」を取り出す方向へと向かったことである。

理念的な性格に対して感じるわれわれの快感は、それが詩的な虚構(poetische Fiktionen)であることを思い出したからといって失われるものではない。あらゆる美的作用の基盤となっているものは歴史的眞実ではなく、詩的眞実であるからだ。とはいえ、詩的眞実とは、何かが本当に起こったということにあるのではなく、それが起こりえたということ、すなわち事柄の内的可能性(innere Möglichkeit der Sache)のうちにある。美的な力はしたがって、表象された可能性(vorgestellte Möglichkeit)のうちにすでにあるはずである(NA 20, 218)

『熱情について』(Über das Pathetische, 1793)において、シラーは、「詩的眞実」は歴史的事実を明らかにすることによって得られるものではなく、「事柄の内的可能性」として「表象された可能性」のうちにすでに存在するものであると論じている。このアリストテレスの『詩学』にまで遡る〈実際に起こったこと〉と〈起こりうること〉という歴史と詩の区別(アリストテレス 2012, 43)は、すでに1788年のカロリーネ・フォン・ボイルヴィッツ(Caroline von Beulwitz, 1763-1847)宛ての書簡にも垣間見える¹⁾。その中でシラーは、歴史において優先されるべき「歴史的眞実」と、小説や戯曲といった詩的描写において満たされなければならない「内的眞実(innere Wahrheit)」(「哲学的・芸術的眞実」)を区別し、後者に価値を見出している(NA 25, 154)。シラーは、「容易に消え去ってしまう個人」の一回限り

の行為ではなく、「類」としての「人間」に普遍的な行為や情緒の法則を知ることの意味を見出した。そのためには、読者と登場人物との内的な感情の「一致が感じられ、また理解される」必要があるという。そしてこれは、その出来事が歴史的事実であるか否かに関わらない。このようなシラー自身の価値観の記述をもとに、受容者と登場人物の内的感情の一致と理解を目指し、また歴史的事象の内的可能性を追求した戯曲『ヴァレンシュタイン』を、歴史的真実ではなく〈詩的真実にしたがった歴史〉として評価しているのが、上記の一連の研究なのである。

とはいえ、ここで疑問も湧いてくる。シラーが直面した史料の信憑性の問題は、たしかにヴァレンシュタインという歴史上謀反人とみなされてきた人物の行為の動機を一義的な意味づけから救い出す方向へとシラーを導いたと思われる。シラーがあらゆる存在に自律の原理を適用しようとしたとする青木の論も、シラーが歴史的事象自体に自律を要求し、書き手による一義的な意味づけから事象を解放しようとした点に着目するものである（青木 2014）。こうしたシラーの試みが、19世紀的な歴史主義の客観性や歴史の実在を想定するナイーブな立場を批判し、詩的な想像力（解釈、語り、理解）に基づく物語としての歴史叙述の意義を改めて問うホワイトらによって評価されるものとなったのも、もっともである²⁾。しかし、客観性に達し得ない歴史の解釈や理解の問題、ヴァレンシュタインの行為を一義的な意味づけから救い出すという動機だけが、シラーをヴァレンシュタインの文学化へと向かわせたわけではないはずだ。シラーが〈起こりうるもの〉として主人公の多義的な動機を受容者に見せようとしたのはなぜか。

ヴァレンシュタインの文学化には、哲学者・美学者・作家・美的人間形成構想の実践者としての複合的なシラーの生と目的が関わっているはずである。シラーは、歴史や芸術が人間にとって持つ人間形成的な意義を追求した。また人間形成を駆動させるための理想の創作技法や仕掛けを人間学的に、経験的に考察すると同時に、超越論的に（自然や偶然に支配され多様なあり方で現象界に存在している人間や芸術の現実の姿をいったん括弧に入れ、人間や美の本質を経験に還元せずに）考察した。こうしたシラーの人間形成構想と関連づけた場合、ヴァレンシュタインの文学化は、世界の表象の仕方と、それが人間にもたらす作用についてのシラーの思想と密接に結びつくことになる。

2. 歴史叙述の問題

この問題を論じるために、まずは1789年のイェナ大学の就任講義『普遍史とは何か。また、何のためにこれを学ぶか』（*Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalgeschichte?*, 1789）をもとにシラーの歴史哲学構想を概観し、歴史叙述『三十年戦争史』のヴァレンシュタイン像の特徴を明らかにしよう。また、歴史叙述や歴史哲学の問題点をシラーがどのように記しているかを見ておこう。

(1) シラーの歴史哲学構想

シラーは歴史を「偶然と困窮による盲目的強制のもとにあった」人類の「自由と人間性への移行」、すなわち人類の高尚化・発展の過程と捉えた（NA 17, 366, 398）。この人類の発展史としての歴史観には、歴史を現在の理想状態へと向かって直線的に発展し続けるものとみなす啓蒙主義的な進歩史観の影響が見られる。シラーにとって歴史家の使命とは、不十分な伝承や記録からなる歴史の出来事の「断片の集合体」を、調和を求める「哲学的な精神」を通じて原因と結果として捉え直し、それらを「技巧的な結合の鎖によりつなぐ」ことで「理性的に互いに関連し合う統一像」、「一つの体系」へと高めること

であった (ebd., 373f.)。このためにシラーは、歴史家が実際の「世界の進行」の中に「一つの理性的な目的」を持ち込むことを要請した。つまりシラーは人類の発展史を描き出すために、歴史の中に「目的論的な原理 (teleologisches Prinzip)」を持ち込むこと、それを通じてある歴史的出来事が「今日の世界の形態」にとってどのような本質的な意味と影響を持ち得たのか、その因果関係を明白に記述することを提案しているのである (ebd., 371)。ある究極目的に向かって人類の文化が発展していく大きな過程を描き出してこそ、その歴史叙述を読む読者は歴史の大きな連鎖の中に現在の自分たちを結びつけ、その発展に貢献するよう促されていくからである (ebd., 375f.)。このシラーの見解には、人類の発展へ寄与せんとする高貴な願望を人々の心に芽生えさせ、その自己形成、さらには人類の発展をも促そうとする歴史哲学の使命が表現されている³⁾。

実際に『三十年戦争史』の描写には、このような歴史哲学的・目的論的な描写が見られる。シラーはこの戦争史を、プロテスタントのスウェーデン王グスタフ・アドルフとカトリックのヴァレンシュタインという二人の歴史上の将軍に焦点を当てて書き上げた。両者の人となりや戦争史の諸要素は、「今日の世界の形態」にどのような影響を与えたかという基準で判断されており、それは、その後の歴史の発展において影響力を持つ主要な理念を持っていた人物や出来事の展開を高く評価するシラーの姿勢にも反映されている。例えば 18 世紀ドイツが自由なプロテスタント国家となったのは、プロテスタントを団結させ和平を結ぼうとしたグスタフ・アドルフの功績とされており、その個人的特性は「正義」や「謙虚」、「高邁な精神」という語で高く評価されている (NA 18, 191)。一方で、その敵であったカトリックのヴァレンシュタインは、さしあたりその搾取や領土拡大と権力への欲により突き動かされる「野蛮」な人物として否定的に評価される (ebd., 187)。「原因と結果」として作用し合う出来事の鎖を描き出している点、因果論的な説明 (例えば登場人物の人格や徳が彼らの代表する宗派と結びついていること、またその出来事がそれが当時の社会に与えた影響を描き出すこと)、またその出来事がその後のドイツの宗教的自由の発展に影響したか否かという、理念や社会の発展を前提とした「今日」の視点から歴史上の出来事を読み取り評価を下していく点で、シラーの歴史叙述には、『普遍史とは何か。また何のためにこれを学ぶか』で記されているような歴史哲学構想が反映されている。

(2) 『三十年戦争史』のヴァレンシュタイン像への反省

この歴史叙述『三十年戦争史』において興味深いのは、シラーが提示するヴァレンシュタイン像とそれに対するシラー自身の反省である。シラーが描くのは、次のようなヴァレンシュタイン像である。ボヘミアの貴族ヴァレンシュタイン伯は、若い頃から皇帝一家に仕え、多くの手柄を立てた。報酬として皇帝からボヘミアの領地を得た彼は、領土と権勢への欲と野心的希望に燃え、皇帝軍を作り上げるものの、搾取と軍隊の増強を繰り返し、最終的に皇帝に対する忠誠を捨てる。諸侯の反感を買ったヴァレンシュタインはレーゲンスブルク選帝侯会議で罷免され、権勢の絶頂から転落する。その後グスタフ・アドルフ率いる新教軍が勢いを増すと、ヴァレンシュタインは再び皇帝軍に呼び戻される。彼はボヘミアの王冠と引き換えに皇帝のために戦うことを了承するものの、密かに饗宴の場を用いて全司令官に自らへの忠誠を誓う文書に署名をさせ、皇帝に対する報復を遂げようと試みる。しかし、結局は側近ピコロミニの裏切りや将軍たちの反抗、陰謀の漏洩、軍の逃亡に遭い、部下の将校により暗殺されてしまう (NA 18, 113-327)。

ところが、このような謀反人としてのヴァレンシュタインの記述を終えたのち、シラーはこの男の歴

史を伝える史料が完全に「忠実」なものではないことを「正義のために」読者に明かし始める (ebd., 329)。非難の対象となったヴァレンシュタインの「行為の秘められた動機 (Triebfeder)」を証明する「記録」は発見されておらず、また彼の歴史を記したのはその敵であった生き残った僧侶であった。その点で、ヴァレンシュタインに謀反の罪を着せ、指揮権や命のみならず名誉までも失わせたその筆は「必ずしも忠実なものではなく」、「もっともらしい推量」に基づいているだけにすぎない、というのである。

生けるヴァレンシュタインの不幸は、彼が勝者を敵としたことであった。——死せるヴァレンシュタインの不幸は、この敵が彼よりも生き延びて彼の歴史を書いたことであった。(ebd.)

ヴァレンシュタインが感じ、思考し、判断して行為する一人の人間であったことは歴史においては無視される。彼が利己的な動機からポホミアの王冠を狙ったのか、和平と宗教平和の実現のためにそれを目指したのか、それを語る人物の政治的立場や情緒に影響された記録からその真の動機を解明する術はない。このように『三十年戦争史』は、ある一義的な理解、すなわち搾取や野心といった言葉に見られるような強奪者、悪人ヴァレンシュタインの行為解釈を提示しながらも、それが決して真のヴァレンシュタイン像とは言えないかもしれないことを読者に示唆する。ここでシラーが要求しているのは、「歴史」の解釈と理解に対する慎重な判断力の必要性にほかならない。史料や史料に基づく歴史叙述を「真実」とみなすことなかれ、というその警告は、読者に「歴史的眞実」と言われているものへの批判的反省を促す⁴⁾。では、もし史料自体がそれを記した人間の情緒、政治的立場などに規定されており、史料に基づく研究が必ずしも「歴史的眞実」の認識へとわれわれを導くものではないのだとしたら、歴史が人間にとって持つ意味とは何なのか。実はこの歴史叙述の問題は、戯曲『ヴァレンシュタイン』のプロローグにも引き継がれることになる。

各陣営の鼻根と憎悪に巻き込まれ
 その性格像は歴史の中で揺れ動く。
 だがいま芸術は、この男をみなさまの目にも
 心にも、人間的により近いものとしてお見せしよう
 すべてを境界づけ、しかと結びつける芸術は
 どんなに極端なものをも自然へと連れ戻し
 生の衝動に突き動かされるままの人間を見つめ
 その罪の大半を
 不幸な星辰のせいにするゆえ。(NA 8, 456)

利害関係や書き手の情緒、あるいは「調和を求める衝動」を満足させようとする歴史家の「哲学的な精神」によって、歴史叙述の中ではヴァレンシュタイン像は一方的に規定され、また今日に至るまでの宗教的・文化的発展という「目的」に適合するように解釈されてしまう。しかしシラーは、「芸術」ならば、これまでの歴史叙述には不可能であったヴァレンシュタイン像を提示することができると訴えている。それはいかなる主人公像を意味するのだろうか。

3. ヴァレンシュタインの文学化

以下では、戯曲『ヴァレンシュタイン』の主人公ヴァレンシュタインの特徴を二つの観点に絞って概略していこう。シラーが描き出したのは、自らが織りなした運命に絡め取られて「自由」を失い没落していく、非常に受動的な主人公像である。

(1) 主人公の不在

シラーが戯曲で描き出したのは、権力の頂点から没落していく將軍の姿である。『三十年戦争史』においてヴァレンシュタインの行為と没落の理由は彼の権力と領土への欲から説明されていたのに対して、戯曲のヴァレンシュタインは「自らの編んだ網に自分を絡め取って身動きができなくなり／それを引きちぎって逃れるには暴力を用いるしかない」状況へと追い込まれる (NA 8, 619)。つまり彼は自らの意志に反して陰謀を実行せざるを得ない状況へと陥り没落するように描かれているのだ。

この外界から襲ってくる運命を、シラーは冒頭から巧みに描写している。第一部「ヴァレンシュタインの陣営」にこの主人公は登場しない。代わりにシラーが読者・観客に見せるのは、その「影の像 (Schattenbild)」である。

今日この舞台に登場するのは彼そのものではない
 だが、その強大な命令により支配される
 無鉄砲な軍団の中に、その精神は息づく
 みなさまはこの男の影像に出会えよう (NA 8, 456f.)

第一部の舞台はヴァレンシュタインの陣営であり、そこで兵士たちが繰り広げる喧騒が描かれる。ヴァレンシュタインを唯一の従うべき存在として崇め慕う兵士、あるいはその権力欲に疑いの目を向ける者、偉ぶるヴァレンシュタインの悪人ぶりを非難し、ヴァレンシュタインではなく皇帝への忠誠を誓う者、こうしたさまざまな陣営での声を通じて「影の像」としてのヴァレンシュタインが作り出されていく。陣営の中で囁かれるこの「影の像」は、皇帝による二度目のヴァレンシュタイン罷免の噂と相まって肥大化し、次第にヴァレンシュタイン本人にまで力を及ぼし、彼を束縛する威力をも持ち始める。

青木は、この陣営がヴァレンシュタインの支配や影響により形成されたものではなく、逆に陣営が作り出す「シルエット」がヴァレンシュタイン像を形成している点に着目している (青木 2014, 35)。そこには、ヴァレンシュタインという実体を捨象した、影たる陣営が独立的に機能し、実体そのものを飲み込んでいくいくさまが描かれている。青木の論によれば、1795 年頃までの諸作品において——例えば『芸術家』(Die Künstler, 1789) では物理的な制約から解放された「美」としての「影」が登場するように (NA 1, 204) ——、シラーは実体を捨象した影 (Schatten) を「(美的) 仮象」と同一視し、その固有の価値を認めていた。ところが『ヴァレンシュタイン』においては影の持つ美しい性格が覆され、「仮象としての影」の持つもう一つの側面が描かれることになった (青木 2014, 31)。実体から切り離されたがゆえに、それは「イメージを伴いながらシルエットを形成」し、物理的なもの・現実を侵食し、「みずから物理的なものを形づくるものへと変容」してしまうというのである。

このヴァレンシュタインの「影の像」をシラーが積極的に評価した「美的仮象」と同一視することは

できるのだろうか。たしかにシラーの述べる遊戯衝動の対象たる「美的仮象」とは、「その物の持つ素材よりも、その形式」を楽しむ心情であるとされる (NA 21, 40)。『美的教育書簡』において「仮象の世界 (Welt des Scheins)」は「実体なき想像力の世界 (wesenlose[s] Reich der Einbildungskraft)」であると表現されているように (NA 20, 401)、実体的・現実的なものに縛られた状態から解放されることこそは、人間が「仮象」を楽しむための条件であった (ebd., 399)。

それが誠実である (いかなる現実への要請との関係を断つ) かぎりにおいて、そしてそれが自立的である (いかなる現実からの援助もない) かぎりにおいて、仮象は美的である。(ebd.)

シラーは「仮象への喜び、装飾や遊戯への愛着」が人間に普遍的に開かれた可能性であることを示唆していた。人間には、対象が〈～に見える、～に聞こえる〉という物の「仮象」を享受する条件たる二つの感覚器官、すなわち視覚と聴覚が備わっている (vgl. ebd., 400)。対象に直接触れる触覚に対して、視覚と聴覚は対象をわれわれから遠ざける。人間がこれらの感覚器官を通じて世界を観察し始めるとき、人間は対象に「われわれが生み出す一つの形式」を与え、それが現実は何であるかではなく、その形式自体を「仮象」として楽しみ始める (ebd., 395)。これは経験世界における「遊戯衝動」(自由) の出現を意味している。『美的教育書簡』において人類の文化の誕生とその発展を考察したシラーは、二重の本性を持つ人間に人間学的条件としてこの「仮象」への道が与えられていることに自覚的であった。世界のうちに「仮象」を見出しそれを享受するという人間の文化生産的な性質は、経験世界の考察において見出される積極的な事実なのである (鈴木 2022, 204-213 参照)。

しかしまた同時に、歴史研究の困難を経験したシラーは、人間がこうした「仮象」と「真実」あるいは「現実」を混同し、「仮象」を自らの世界とみなしていく世界構築的な存在であることにも自覚的であった。そこに存在しない対象を感性的に表象する精神の働きや能力を意味する *Einbildung* (*Einbildungskraft* 構想・想像力) という概念は、同時に「誤った表象」、「錯覚」という意味をも持つが⁵⁾、人間が自身の内に「像」を構成していく過程もまた、外界からの刺激や衝動、欲求、情緒といった内外の自然からの人間学的な制約下にある。人間は「見かけ (Schein)」と現実を混同する可能性を持ち、それどころか「見かけ」と現実・真実を区別する術を持たない。とりわけその初期に観察や治療、生理学実験などを基盤とする、実証的な人間学を学んでいたシラーは、人間が外部の自然 (環境) からの刺激や自分自身の内部の自然 (身体) から発せられる欲求や欲望によって幾重にも制約され、規定された存在であることを強く意識していた。人間学的制約のもとに生きる人間にとって、世界は自らの構成する視野の中でしか立ち現れてこない。

このようなシラーの「仮象」に関する論を考慮すると、ヴァレンシュタインの陣営の多様な声が見せるのは、実体を持った物の「真の像」ではなく、情緒や欲求、皇帝への謀反への恐れといった心情や利害関係に左右される人間たちの狭い視野が作り出すヴァレンシュタイン像の集合体として解釈できる。そして、この「影の像」がヴァレンシュタイン本人の行動を制限していく様子を通して、シラーは人間学的制約のもとにある人間が対象や世界と向き合う際に、仮象 (見かけ) と真実 (実体) を混同し、それによって物の「真の像」が見えなくなっていくさまを克明に描いてみせるのである。仮象を真実と取り違えることさえなければ仮象は真実を害することはない、とシラーは述べていたが (NA 20, 400)、ヴァレンシュタインの本心も意図もわからぬままに囁かれ、恣意的なヴァレンシュタイン像が構築され

ていくその過程は、人間の狭い視野による世界構築の過程と重なる。それは「歴史的眞実」に辿りつくことのできないわれわれ人間の制約性そのものなのである。

では、外部から幾重にも作られていく「影の像」を描くことによってシラーが達成したものとは何か。これは〈ヴァレンシュタインを直接描写しない〉手法であった。主人公を直接描写せず、陣営が作り出すその「影の像」のみを描くことにより、シラーは歴史の中で「謀反人」として一義的な解釈を施されてきたこれまでのヴァレンシュタイン像を撤回することに成功している。つまりシラーは「眞の像」から一步遠ざかったところで、書き手によっても、受容者によっても一方的に規定されることのないヴァレンシュタイン像を作り出そうとしているのである。

(2) 行為しない主人公

このように一步引いた形で主人公像を形作っていくシラーの手法は、その後の戯曲の展開にも通じる。『ヴァレンシュタイン』第二部「ピコロミニ父子」にはようやく主人公が登場するも、この主人公は第二部、第三部を通してほとんど行為しない。絶大な権力を持つに至ったヴァレンシュタインを危険視する皇帝は使者を送り、ヴァレンシュタインをボヘミアから撤退させようと迫る。側近たちはヴァレンシュタインに皇帝の先手を打つよう求めるものの、その本人は決断を躊躇し続ける。本心を明かさないうヴァレンシュタインを前に、側近たちは彼をけしかけ皇帝に対抗させようと画策を練る。その工作により、ヴァレンシュタインは凶らずも皇帝ではなく自身への忠誠を誓う諸侯たちの署名状を手にしてしまう。さらに第三部「ヴァレンシュタインの死」で事態は急展開し、敵軍との同盟の企みが皇帝に漏洩すると、ヴァレンシュタインに引き返す道はなくなる。親友オクターヴィオの裏切りや、陣営の皇帝側への寝返り、味方の側近らによる早まった熱狂的な行動、こうした一連の外界の圧力がヴァレンシュタインの行為の余地をどんどん狭め、本当は謀反人ではなかったかもしれないヴァレンシュタインは、最終的に謀反人として振る舞わざるを得なくなる。行為の自由を制限する運命に直面した主人公の内面の苦悩は、第三部の独白において、次のように表現されている。

あの行為を考えついたからといって、それを実行せねばならないのだと？（中略）／本気で行おうとしたわけではなかったのだ、あれが決心であったことなどなかった。／頭の中で考えるだけで俺は満足し／自由と可能性に俺は心惹かれた。／王になることを望み、その幻影で心を楽しませることが不当だったというのか？（中略）／胸のうちにあるうちは、俺の行為はまだ俺のものだった。／一度その母体、心の安全な片隅を離れ／見知らぬ生の中に放り出されると／それはどんな人間の技をもっても伺い知れない／あの悪意に満ちた諸力に翻弄されることになってしまう。（NA 8, 619f.）

心の中にあるうちは自由であった意志も、いったん心の外へ出てしまえば、それはわれわれには制御することのできないものになってしまう。では、ヴァレンシュタインの述べる「あの悪意に満ちた諸力（jene tück'sche Mächte）」とは何か。シラーはこれを「人の心の中に巣喰い、わたしに立ち向かってくる目に見えぬ敵」、「これまでいつも存在していたもの、そしていつも戻ってくるもの、そして今日通用したから明日も通用するもの」と表現し、「人は自分を育てたこの乳母を習慣（Gewohnheit）と呼ぶ」と述べている（ebd., 620）。アーデルングによれば、Gewohnheit とは、あることを幾度も繰り返す

ことで最終的に形成される素質や技能であり、反復するうちに蓄積し、無意識のうちに「もう一つの自然 (ander[e] Natur)」となったものを指す。それは理性的・感性的存在である人間に本来的に備わっている二重の自然 (本性) に対して、後天的に与えられた人間の「自然」であるとも言える。この二つの「自然」は互いに絡み合い、ヴァレンシュタインを取り巻き、彼をがんじがらめにしていく。

『崇高について』(Über das Erhabene, 1801) の中で、シラーは人間を否応なく現実的なものへと結びつけている自然の諸力を「力としての自然 (Natur als Macht)」と呼んだ。この立ちはだかる「力としての自然」は、人間の認識・行為にあたっての避けられない条件であると同時に、それは人間の「自由」を奪う威力を持つのである (NA 21, 40)。

このようにシラーは、戯曲のヴァレンシュタインを必然に迫られて皇帝への反逆行為を決心せざるを得なくなる状況へと追いやった。ヴァレンシュタインは偶然を否定し、すべてを「必然 (Notwendigkeit)」や「運命 (Geschick)」とみなす (NA 8, 620)⁶⁾。読者・観客にとって、彼の行為は道徳的 (自由=自律的) な行為としても、責任を伴った行為としても、理念に基づく行為としても現れてこない。ディルタイは、シラーの描く「運命」を「環境世界が精気溢れる生命へと介入すること」、そして「その介入によってこの精気に満ちた生命が、それが持つ特性に基づき、ある特定の方向へと向かうよう強いられる」ことと言いつづけている (Dilthey 1957, 409)。

〈～を欲する〉という願望なく、〈～せねばならない〉とき、人間は一種の「強制的力 (暴力 Gewalt)」のもとに屈した状態にある (NA 21, 38)。『美的教育書簡』で、シラーは現実世界における二重の本性の偏った人間の状態を「暴力」に耐えている状態とみなし、この「暴力」を「美的状態」を通じて解消すべきであると考えた。それにもかかわらず、シラーはヴァレンシュタインから「自由」を取り上げ、彼を〈～せねばならない〉という「暴力」に耐えなければならない状態で描き出したのである。『美的教育書簡』で「美的経験」を通じて人間の「自由」への可能性を主張したはずのシラーは、なぜ「自由」を失う主人公を描き出したのだろうか。

4. 近代批判と「調和」の断念

(1) 近代批判

限られた範囲の解釈ではあったが、シラーが戯曲で描き出したヴァレンシュタイン像の特徴を見てきた。「仮象」に飲み込まれその本質たる実像が失われていく過程、圧倒的な自然の諸力を前に「自由」を失っていく主人公像、そして運命に翻弄され必然的に没落する将軍の姿は、『三十年戦争史』における権力を追い求めた悪人ヴァレンシュタインによる謀反についての描写とは大きく異なる。以下では、シラーのこのヴァレンシュタイン像の変化を、美学的著作でシラーが論じている啓蒙主義的な歴史哲学構想の破綻や近代の能動的な主体批判と関連づけながら解釈していくことを試みる。

まず参照したいのは、『崇高について』⁷⁾ でなされるシラーによる歴史哲学批判である。この中でシラーは歴史と人間の関係を取り上げ、われわれが「光と認識に大いに期待をかけながら」歴史に近づこうとすれば、「大きな失望」を感じるだろうと述べている (NA 21, 49f.)。

道徳的世界が要求するものと、現実世界が実際に成し遂げるものを一致させようとする、善意から出たあらゆる哲学の試みは、経験の発言により否定される。自然が自らの有機的世界において、どれほど快く判断の統制的諸原則に倣っている、あるいは倣っているようにみえたとしても、自由の

世界では自然は言うことなど聞かず、思弁的精神が彼女〔自然〕を捕え連れてゆこうとしているその手綱を、自然は断ち切ってしまう。(ebd.)

第一に、ここで表明されているのは、「自然の無秩序」を調和の中に解消させようとする歴史哲学の試みの失敗についてである。『普遍史とは何か。また、何のためにこれを学ぶか』において、シラーは「無法則」に思われる世界の進行を導く「必然性という紐帯」を見出すことを歴史家の課題としていた。そしてそのために調和的・目的論的な原理に基づいて個々の歴史的事象を原因と結果の関係で結び、人類の大きな発展史を描き出すことを歴史研究、またその叙述の使命とみなした。ところが上記の引用では、目的論的な原理を歴史研究へ持ちこみ、一つの目的へ向かって進んでいく人類の歩みを描き出すことと、現実世界で実際に起こる混沌とした事象の間に存在する埋めがたい溝が問題とされている。実際に歴史研究を試みるうちに、シラーは「賢き計画よりもはるかに狂気じみた偶然が支配しているように見える世界」に出会い、「自然の偉大な営みを知性という惨めな松明で照らし」、「自然の大胆な無秩序を調和の中に解消しよう」とする歴史哲学の試みの破綻を悟ることになったのである (ebd., 48)。ここには、「今日」に至るまでのドイツの発展に好都合となるように歴史的事象の評価をし、ヴァレンシュタインの行為とその意味を決定していた自身の歴史叙述に対する反省も含まれているのかもしれない。

第二に、この歴史哲学批判には、目的論的原理を通して自然や歴史と関わる、近代人に特有の態度への反省が含まれていると考えられる。目的論的に自然や歴史を観察するとは、自然や歴史の内になんらかの合目的的な対象の姿を見出すことを意味する。これはカントが、特殊なものから普遍的秩序を見出そうとする反省的判断力に与えた原理でもある (KU, XXVII)。反省的判断力の作用する目的論的判断とは、対象を〈～とみなす〉主観の悟性の働きにより、対象 (多様な自然) そのものが本来持つわけではない目的をそこに与え、多様性を持つ自然の法則を統一するかのごとき根拠を見出す原理である (KU, XXXVIII)。そこで見出された自然の合目的性とは、完全な連関を保つような一個の経験に達するために、人間がその対象を反省する際に従う判断力の主観的原理なのである (KU, XXXIV)。しかし、1790年代のシラーにとって、概念や理念に従って対象の「目的」とされる概念を見出す目的論的判断は批判対象となっていく。なぜなら、対象の多様性を顧みずに、対象を主観の概念や目的の従属下に置いていく近代的で能動的な態度は、その態度をやめたときに現れる世界 (多様性) との出会いを不可能にってしまうからである (鈴木 2022, 172f. 参照)。

シラー研究においてあまり注目されてきたとは言えないものの、このような近代的能動的な主体への批判は、1790年代の美学的著作の中に繰り返し登場する。『美的教育書簡』においては、人間の「受け入れる能力 (das empfangende Vermögen)」に取って替わろうとする「規定する能力 (das bestimmende Vermögen)」が批判される。例えばシラーは、近代の自然科学者が多くの現象を見逃している原因を、ありのままの自然と対峙しそれを「受け入れる能力」の欠如、自分の領分を超えた理性の横暴、そして多様性を顧みず先走って対象を目的のもとに統合してしまう (「一つひとつの音を集めようともせず、その調和を得ようと先走る」) 思考力といった自然科学者の傾向に見た (NA 20, S. 350, Anm.)。また、^{ハーモニー}芸術・美の成立条件を創作美学的視点から追求した『カリアス書簡』におけるシラーの「美」の定義自体にも、この「規定する能力」の暴走への危機感は現れている。その中で、シラーは美を「現象における自由」であると論じたが (NA 26, 183.)、これは対象が主体の悟性概念や対象の外部に存在するもの (例えば目的や価値、素材) によって規定されることなく、自己自身を規定しているように見えるとき

に初めて、「美」の経験が可能となることを意味している。シラーは、〈対象が自由である（＝自己規定している）ように見える〉という積極的な状態を、〈対象が外から規定されていない〉という表象を主体が受け取ること、と消極的に言い換えることによって説明しようとした。これは、主体や外部の何かによりその対象を「規定する」という行為を避けようとするシラーにとって、必然的な説明の仕方であったと言える（ebd., 200f.）。主体が「理論的な追求や熟考を通してではなく、対象をそれが単に現れるままに受け取る」（ebd., 193）とき、われわれはその対象をある既知の概念により規定するという通常の認識プロセスとは異なる仕方外界と関わる。そしてこのとき、われわれには外部にあるものによって規定され得ない、対象の異なるあり方と出会う可能性が開けるのである。

本来は多様なあり方で存在するものに理性の暴力を振るうことで、それを調和した体系へとまとめ上げることを目指す歴史哲学への批判、そして多様性を顧みずに先走って対象を目的のもとに統合してしまう自然科学者の思考力への批判、あるいは外部から規定されてしまう（主体により概念規定される）ことで消えてしまう、「物の自己規定」という概念をもととしたシラーの美の定義。こうした1790年代のシラーの思想に通底するのは、近代特有の能動的な主体のあり方が、本来的な自然を「受け入れる」ことを不可能にし、またその際に人間が得る可能性があったかもしれない異なる物の見方を不可能にしていることへの危機感である。

このようなシラーの問題意識を背景に置いてそのヴァレンシュタイン像の変化の理由を問うとき、そこには「歴史的眞実」とみなされているものへの懐疑や、一つの視点から捉えられた人物像への批判以上のものが見えてくる。つまり、本来の多様な自然を一つの目的や概念へと集約してしまうことなく、その多様性自体を受け入れることの可能な主体の形成、そしてそのために「規定する能力」のみならず「受け入れる能力」（著者強調）を培うこと、というシラーの人間形成的な関心がそこには反映されている。これは、シラー自身によるヴァレンシュタイン像の提示の仕方に関わるのみならず、読者に対してもまた要求される価値観なのである。

(2) 調和から不調和へ

では、近代特有の対象を規定したがる主体のあり方が不可能にしてしまった世界との関わり方とはいかなるものなのか。多様な自然を主観の作り出す目的という概念や調和的な体系の従属下に適合させることなく、人間が本来的な自然を「受け入れる」ことができるとき、いかなる経験が可能になるのか。実は『崇高について』の中で、シラーは歴史哲学構想の中で披露されていたのとは異なる、自然や歴史との対峙の仕方を提案している。

この無法則の混沌とした現象を統一した認識のもとに従わせる意図を自発的に放棄するなら、こちらの面で諦めたものを、別の面から豊かに得ることができる。（NA 21, 48）

「自然を解釈する（*erklären*）ことを断念し、この自然の把握不可能性（Unbegreiflichkeit）そのものを判断の立脚点とする」ならば、歴史的对象としての世界が「自然の諸力（Naturkräfte）同士の戦いやそれらと人間の自由の葛藤」という「崇高の対象（*erhabenes Object*）」へと変化することをシラーは示唆している（NA 21, 49）。

『三十年戦争史』では謀反人として規定されていたヴァレンシュタインは、戯曲においては決断に躊

躊躇し続け、苦悩する存在である。戯曲のヴァレンシュタインは、周囲の「あの悪意に満ちた諸力」により規定されていくが、それを眺める読者や観客にとって、その行為の意味づけは開かれたままである。つまりシラーは、本来は接近不可能であるはずの対象（ヴァレンシュタインの真の像）を規定し、読者の理性を満足させる調和的な発展史の中に組み込む（意味付与する）のではなく、その行為の動機や意図をあえて把握不可能なものとして描き出した。またシラーは、実際に一人の人間としてのヴァレンシュタインが陥ったであろう「自然の諸力と人間の自由の葛藤」を描き出そうと試みた⁸⁾。「混沌とした現象」や「把握不可能性」に耐えるという態度こそは、シラーが説いた近代的能動的な主体性の放棄という主張と重なる。つまり戯曲『ヴァレンシュタイン』は、読者や観客の目的論的判断を満足させるヴァレンシュタイン像を提示する代わりに、「無秩序」や対立——この場合はヴァレンシュタインという一人の人間の内外における自由と自然の諸力の戦い、そして彼がそれに敗れるさま——を読者に提示する試みであったと言えるのだ。「自由」の思弁的精神の手綱で「自然」を制御することなく、「自然」と「自由」が対立するまを描き出すこと。これこそは、「調和を求める衝動」を満たそうと、感受能力に先走って暴走する理性に歯止めをかけようとするシラーの計画だったのである。

出来事を一つの目的のもとに論じ調和に還元してしまうことなく、「自然の大胆な無秩序」に敗れる主人公を提示することは、シラーが論じる「崇高（das Erhabene）」の経験の条件となる。シラーによれば、崇高とは「対象を総括的に把握する力がないという無力感や、その力が限られているという感情」から成り立つ。つまり、主体の力による規定を超える力（Macht）としての対象に遭遇したときに崇高の経験は可能となる（NA 20, 137）。

シラーはこのような崇高の体験を、ヴァレンシュタインが彼を取り巻く機械論的・必然的な運命に巻き込まれていく姿を描くことで実現しようとした。『悲劇の対象を楽しむ根拠について』（*Über den Grund des Vergnügens an tragischen Gegenständen*, 1792）の記述によれば、苦しむよう定められていない人間が苦悩する場合、それは自然における一種の反目的性（Zweckwidrigkeit）であるように見え、これは受容者の感性に不快を与える。しかしわれわれの幸福を求める衝動がこの不快に出会い、感性が苦悩との戦いに巻き込まれるとき、それは想像力の及ばないものに対して「優越」しているわたしたちの内にある他の能力、すなわち苦悩に巻き込まれる感性を克服することのできる自らの精神の力を意識させる契機にもなる。これを通じて人間は自身の内に備わる道徳的な本性に対して合目的性（Zweckmäßigkeit）の表象を与える（vgl. ebd., 137f.）。こうして「同情（Mitleid）」における快が生まれる。つまりシラーは悲劇芸術を通してある人物の苦悩を描くことで、それを眺める者の感性に苦しみを与えながらも、苦悩を克服することのできる内なる精神の力、自由の力を意識するという崇高の経験を目指したのである。

ヴァレンシュタインは、陣営や占星術が象徴する、自らの意のままにならない「あの悪意に満ちた諸力」、「力としての自然」に取り巻かれ、それでも自身の運命を自身で決定しようと「自由」を目指してその力に抵抗し、苦悩する人物である。決定された運命に抗い自らの「自由」を行使しようとするその描写は、「感性と道徳性の両面を備えたものの苦悩」を描き出そうとする試みとして捉えられ、その点でこの主人公は読者・観客に「人間的により近い」（すなわち、普遍的な情緒的・認識的法則にしたがって感じ、理解することのできる）存在として描かれている。それゆえに彼の没落はわれわれに「同情」を引き起こすことができるのである。

「道徳的世界が要求するものと、現実世界が実際に成し遂げるもの」の間にある溝は、いまや調和を

求める精神により埋められるものではなく、両者（「自然」と「自由」）の対立と矛盾という形で提示されることになった。ヴァレンシュタインの文学化は、受容者に「崇高」の経験の場を用意し、「人間の自由と人間性への移行」^{フマニタート}を促進する試みとして捉えられるのである。

5. 「詩的真実」の可能性

『美的教育書簡』によれば、美的経験を通じて素材衝動と形式衝動が相互にバランスよく作用するとき、両者の間に均衡が生まれ（遊戯衝動）、人間は現実的なもの、実体に縛られた状態から解放され、物質に関係なく形式（仮象や装飾や遊戯）を楽しむ自由を手にする。しかし、その対象を目的論的判断により主体の持つ概念により規定してしまえば、それは「仮象」ではなく「現実」として人間の生を支配することになる。シラーが悲劇『ヴァレンシュタイン』で描き出したものとは、まさにこうした人間学的な規定性に主人公が翻弄されていく姿であった。

シラーがあえて自律的・能動的に行為していく（自由な）ヴァレンシュタイン像を示さなかった背景には、『三十年戦争史』で直面した史料の信憑性という問題の他に、対象の多様な自然の姿を一方的に規定し、「調和」に落とし込もうとする歴史の見方への批判があり、またそこに通底する近代的な能動的主体の目的論的原理に基づく世界の見方に対する危機感があったと考えられる。本来は「把握不可能」なはずの歴史上の人物ヴァレンシュタインの行為に意味を与え、発展史の調和的秩序の中に組み込もうとするとき、人間としてのヴァレンシュタインの本来の姿が失われていくことにシラーは気づいていた。ありのままの自然と対峙しそれを「受け入れる」前に、自身の与えた目的や概念のもとに多様なものを統合してしまう近代人の物の見方は、自然本来の多様性や物の真の姿を見る目を失わせ、また本来であったなら得られたかもしれない異なる経験を不可能にしているのではないかとするシラーの危機感がここにはある。この問題の解決に寄与するとシラーが考えたものは、対象を調和的秩序の中に適合させていくことを目指す歴史叙述（歴史哲学）でも、個別・特殊なものに固執する「歴史的真実」でもなく、「詩的真実」の法則に従う芸術であったのだ。

『ヴァレンシュタイン』は「詩的真実」の法則に従った創作であった。シラーは理性を満足させる調和的ヴァレンシュタイン像を提示することに甘んじず、一人の「人間」として自然の諸力と自由の葛藤に巻き込まれ、それに苦悩する主人公像を描き出した。二重の本性を持つ人間に普遍的な情緒的・認識的な法則に照らし合わせて「起こりうること」を描くとき、「生の衝動に突き動かされ」、自由を制限された主人公の苦悩は、受容者の「目」にも「心」にも「人間的により近いもの」として理解され、また感じられることになる（NA 8, 456）。この感性と道徳性の両面を備えた一人の人間の苦悩と葛藤、自然の諸力（運命）により謀反へと追いやられていく姿を通して、シラーはヴァレンシュタインという歴史的人物像を単なる「謀反人」として目的論的に規定しようと先走るわれわれの「規定する能力」に一度立ち止まるよう促す。この不調和の像を描く試みは、受容者に「崇高」の経験の場を用意する試みでもあった。不調和の世界が提示するものは「どう行為すべきなのか」という道徳的な要請ではなく、人間にとって「可能な行為」についての反省である。それは、われわれが現実世界において決断し行為していくにあたり、自身のさまざまな規定性に気づき、反省していくための第一歩となりうるのである。

このようにシラーによる「詩的真実」の追求は、最終的に「調和のユートピア」のみならず「不調和の現実」をも映し出すべきものとして想定されていた。この事実は、その背後にあるシラーの美的人間形成構想の射程の広さを浮き彫りにしている。とはいえ、シラーの人間形成構想において、感性と理性

の調和を目指す「美的経験」と両者の対立を目指す「崇高の経験」がいかなる関係にあり、どのように補完し合うものとして想定されていたのか追求することは、次の論考の課題としたい。

注

- 1) シラーはレッシングのアリストテレス解釈を通じてその詩学には触れていたが、実際にこれを読むのは1797年になってからである。
- 2) ホワイトは、歴史的記録の意味を解釈する仕方を見極めて「客観性」に到達するための根拠を提供してくれる科学などは存在しないと強調する(ホワイト2017, 183)。そして歴史研究が経験的に「事実」と「意味」を確定するものとしてディシプリン化し、世界の「調和」をよそおう場合、歴史が脱崇高化していくことを批判的に論じた。すなわち歴史は「美しいもの」(調和)のカテゴリーと結びつく一方、歴史の「無意味性」、「道徳的無政府状態」を示唆しうる「崇高なもの」(不調和)は排除されてきた、というのである(171ff)。シラーは『崇高について』の中で世界史を「混乱」、「不確実」、「道徳的無政府状態」とみなし、こうした混乱こそが「崇高」の経験の対象となり人間に道徳的「自由」の感覚を生み出すと考えた(174f)。ホワイトはこのシラーらの崇高論が、歴史に関する一つの可能性を提示するものだと論じている。
- 3) エーダーは、人間の理性の発展にとって歴史の有用性を主張する点で、シラーの歴史記述は啓蒙主義的な歴史研究に規定されたものであったと指摘する(vgl. Eder 2011, 699)。また、シラーの歴史観ならびにその歴史哲学の人間形成的な意義の追求に関しては、鈴木2022, 106-114を参照のこと。
- 4) 18世紀中頃にゲッティンゲンの歴史家たちが批判的に史料と取り組むことを目指し、歴史叙述を学問の名にまで高めようとした頃から、史料の確実性に依拠した歴史研究の方向性が生まれる。後期啓蒙主義の歴史家たちは学問的な「真実」の要請を歴史叙述の第一原則に据えた(vgl. Prüfer 2002, 102ff)。
- 5) アーデルングの辞典 *Einbildung, Einbildungskraft* の項目を参照。
- 6) 運命の必然性を読み解き、行為の決断をしようとするヴァレンシュタインの姿を描くにあたり、シラーは占星術のモチーフを用いた。ゴードルによれば、占星術は人間に対して影響力を振るう外的世界のシンボルとして、人間の普遍的な制限性、人間学的な規定性を示す。その全ての規定要因をわれわれは知ることができないし支配することもできないが、行為するかしないか、どのように行為すべきかを決断するためには星を読み解き解釈できなければならない。すなわち占星術というモチーフは、自らの運命を規定する外的世界への人間の恐怖に基づいており、自らを規定するものの正体を知らうとする人間の本能を体現していると同時に、それを読み解くことで自らの行為を決断しようとする人間の試みとして理解できるという(vgl. Godel 2009, 118f)。
- 7) この美学的著作の正確な執筆時期に関しては研究者間で意見が分かれているものの、その主題からすると1793年以降の数年間に執筆され、1801年に最終的に刊行されたとする見解が一般的である(vgl. Zelle 2011, 479f)。
- 8) エルムも同様に、「歴史の不可解さ」が戯曲『ヴァレンシュタイン』の本質であるとし、戯曲『ヴァレンシュタイン』は「理性的に関連する全体像」を提示することに逆らうと論じている(Elm 1996, 90)。

文献

Schillers Werke. Nationalausgabe, begründet v. Julius Petersen, fortgeführt v. Lieselotte Blumenthal und Benno von Wiese, [seit 1992] im Auftrag der Stiftung Weimarer Klassik und des Schiller-Nationalmuseums Marbach, Norbert Oellers (Hrsg.) Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1943ff. *ドイツ語著作集の略号 (NA), 巻数, 頁数を本文中に記した。日本語引用は原典に基づく私訳だが、以下の邦訳を参照した。

『美的教育』浜田正秀訳, 玉川大学出版, 1982年

『三十年戦争史』林健太郎ほか訳『シラー選集』第三巻, 新関良三編, 富山房, 1942年

『ヴァレンシュタイン』濱川祥枝訳, 岩波書店, 2013年

青木敦子『影像の詩学—シラー『ヴァレンシュタイン』と一義性の思考』月曜社, 2014年

青木敦子「シラーにおける美的表象の可能性」『美學』46巻1号, 美學會, 1995年

アリストテレス『詩学』松本仁助他訳, 岩波文庫, 2012年

Otto Dann: Schiller, der Historiker und die Quellen; in: Otto Dann, Norbert Oellers und Ernst Osterkamp (Hrsg.),

- Schiller als Historiker, Stuttgart u.a. (Metzler) 1995.
- Wilhelm Dilthey: Von deutscher Dichtung und Musik. Aus den Studien zur Geschichte des deutschen Geistes. 2., unveränderte Auflage, Stuttgart (Teubner Verlagsgesellschaft) 1957.
- Jürgen Eder: Schiller als Historiker; in: Helmut Koopmann in Zusammenarbeit mit der Deutschen Schillergesellschaft Marbach (Hrsg.): Schiller-Handbuch, Stuttgart (Kröner) 2011.
- Theo Elm: „Ein Ganzes der Kunst und der Wahrheit“. Zum Verhältnis von Poesie und Historie in Schillers „Wallenstein“; in: Hans-Jörg Knobloch, Helmut Koopmann (Hrsg.): Schiller heute, Tübingen (Stauffenburg) 1996.
- Rainer Godel: Schillers „Wallenstein“-Trilogie. Eine produktionstheoretische Analyse, St. Ingbert (Röhrig Universitätsverlag) 1999.
- Ders.: Schillers „Wallenstein“. Das Drama der Entscheidungsfindung; in: Andre Rudolph und Ernst Stöckmann (Hrsg.): Aufklärung und Weimar Klassik im Dialog, Tübingen (Niemeyer) 2009.
- Michael Hofmann: Die unaufhebbare Ambivalenz historischer Praxis und die Poetik des Erhabenen in Friedrich Schillers Wallenstein-Trilogie; in: Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft 43, 1999.
- Immanuel Kant: Kritik der Urteilskraft. 2. Aufl., Berlin (F. T. Lagarde) 1793; in: Wilhelm Weischedel (Hrsg.): Immanuel Kant Werkausgabe Bd. 10, Frankfurt/Main (Suhrkamp) 1974. (『判断力批判』篠田英雄訳, 岩波文庫, 2010年) *略KU
- Norbert Oellers: *Wallenstein* (1800); in: Matthias Luserke-Jacqui (Hrsg.): Schiller-Handbuch. Leben - Werk - Wirkung, Stuttgart, Weimar (Metzler) 2011.
- Thomas Prüfer: Die Bildung der Geschichte. Friedrich Schiller und die Anfänge der modernen Geschichtswissenschaft, Köln (Böhlau) 2002.
- 鈴木優「フリードリヒ・シラーと文学の使命——人間形成における『美的仮象』の役割」慶應義塾大学大学院社会学研究科, 博士学位論文, 2022年
- ヘイドン・ホワイト『歴史の喩法——ホワイト主要論文集』上村忠男訳, 作品社, 2017年
- Carsten Zelle: Über das Erhabene; in: Matthias Luserke-Jacqui (Hrsg.): Schiller-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung, Stuttgart, Weimar (Metzler) 2011.